

西照

西照寺寺報「さいしょう」

第22号

2008年10月31日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺

高岡市吉久2丁目4-40

HP <http://nisitera.eek.jp>

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつめの時間

十一月十四日(金) 午後二時(逮夜) 〱

午後七時(初夜) 〱

十五日(土) 午前九時(宸朝) 〱

午前九時半(満日中) 〱

布教使 小島信師 射水市堀岡 聞光寺)

西谷山西照寺



吉久西照寺HP開設 <http://nisitera.eek.jp>

釈尊しやくそんのさとり

釈尊の出家の動機しもんしゆつぎの一端を物語る「四門出遊」というお話があります。

ある日、物思いに沈みがちであったシツダールタ王子じようぼんのう（のちの釈尊）を心配した父の浄飯王は、家来を連れてカピラ城の東の門から遊びに出されます。

その折に、道端を顔がしわまみれで、こしが曲がり背中をまるめ、杖にすがって喘あえぎながら歩いている人をご覧になりました。

「あれは、なんだ？」と家来に聞かれます。

「老人というものです」

「わたしもそうなのであろうか」

「そうです。人間はみんなあんなすがたになるのです。シツダ

ールタさま、あなたもです」

「わたしも、ああなるのか」

そう言われた王子は、青春の輝きも色うせ、意気消沈して城へと帰って来ました。

別の日、今度は南の門から遊びに出られます。

そこで、病人に出会われ、同じような質問をします。

「あれは？」

「病人です。人間は、いつかあのように病気になって苦しまねばなりません。王子あなたもです」

つらい気持ちになり、ふさぎこんで直ちに城に帰られました。

また別の日、西の門から遊びに出られます。

今度は、葬式に出会われました。

同じような質問をして、私も最後は死なねばならんのかと、いよいよ沈みこんで、城へと帰って行かれました。

次の日です。北の門から遊びに出られた時に、褐色の衣を身に着おこけ、厳おこかに歩いて行く一人の修行者に出会われました。穏やかですがすがしい顔をしています。

そこで、王子は聞きました。

「この世は、楽しく生きたいと思っても、老病死という苦惱から免れることはできません。そう思うと気が沈み、悩まずにはおれません。なのに何故あなたは、そんなすがすがしい顔をしておられるのですか」

「あなたもね、修行をして真実（法）がわかるということとこんなような顔になりますよ」と修行者はこたえました。

このような出来事が、出家の動機になったのではないかというお

話です。

さて、出家した釈尊は、当時の習慣にならって、先ず徹底した苦行に入ります。それは、苦しみや悩みに負けない強靱な精神や肉体を鍛えるというものでした。しかし、



体は骨と皮となり衰弱していくばかりです。

やがてそのことの無意味さに気付いた釈尊は、スジャータの乳粥がゆの施しを受け、元気を取り戻して菩提樹の下で瞑想に入ります。釈尊の瞑想の課題は、何であったか。おそらくは、こういったことではなかったのでしょうか。

「なぜ自分は苦悩するのか。苦悩の原因は何か。鳥や牛というような動物は、人間と同じように、年をとり、病気になる、死んでいくのに、そのことを悩んでいるようには見えない。ありのままに与えられた現実を生きている。なぜ人間である私だけ

が、老病死の現実に悩むのか。」

瞑想の中から、釈尊がさとり気付いたのは、私が悩むのは、悩まそうとするはたらき（法）がはたらいているからだ、という発見でした。

そのはたらきを「阿弥陀あみだ」と教えてくださいました。「ア」は否定語で、「ミダ」は量はかりという意味で、一メートル、二メートルという物差しです。つまり、私の自分中心的な我に執着するという我執の物差しでない、真実（法）のものさしがはたらいているということでした。

よく釈尊のさとりを万有引力の法則を発見したニュートンにたとえられることがあります。ニュートンは、リンゴが木から落ちるのを見て、その法則を発見しました。釈尊は、苦悩する自分の事実から、阿弥陀の法のはたらきを発見しました。その法のはたらきに耳を傾け従っていくところに、自分のものの見方考え方が正され、苦悩から解放されていく道があるとお説きくださいました。



（裏面に続く）

(中面からの続き)

私たちの日常を考えるとどうでしょう。

幸せと思う時や楽しい時には自分の人生が問題となるようなことはほとんどありません。何かに挫折し、老病死の事実に苦しみ悩む時、自分の人生は何であったのかと問われ、私のあり方が課題となつてきます。そこに仏法を聞こうという心も開かれてきません。

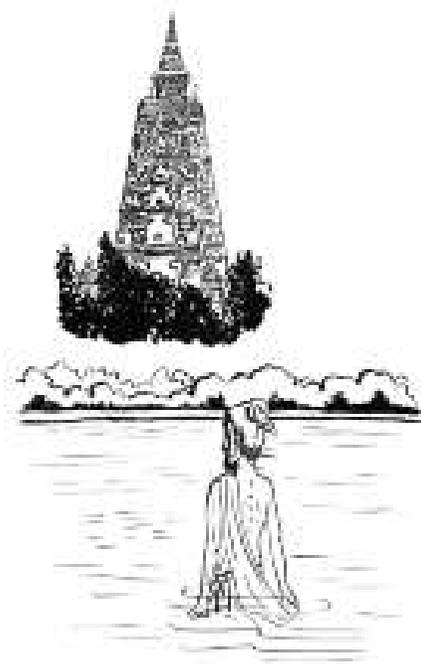
以前岡西法英という先生が、「神経の願い」という話をされています。

私たちはあまり意識したことはありませんが、体の中には神経というものが流れている。怪我をしたり、胃などを無理すると痛いと感じます。「ああ、私の体には神経が流れていた」とそこで意識するわけです。私たちは、ある意味で健康であつてくれという神経の願いの中に生かされているといつてもいいのではないか。その願いに反すると痛いという形で、私にその願いを届けてくれる。それに気づいて、病院へ行ったり摂生せつせいしていくと自ずと健康を回復していくが、好き勝手にやっていると健康を害していく。

というような話でした。

これと同じようなことではなからうかと思えます。

私の苦悩を通して、阿弥陀の願いが届けられているということ
です。



また、ヴァツカリーという釈尊の弟子の話も示唆にとんでいきます。臨終の間際にもう一度釈尊を礼拝したいという願いに応じて、釈尊が枕元にやつてきます。一心に釈尊を拝むヴァツカリーに対して、

「私もやがて朽ち果くちてていく。私のこの汚れたからだをみて、何になるのか、私のこの体をみるものが仏を見るものではなくて、法を見る者こそ仏を見るのだ」

と釈尊が発見した法に従って生きることの大切さを教えてくださっています。

この法は、南無阿弥陀仏という名前(名号)となつて私に届けられています。

その名号を称えながら、そこに込められた阿弥陀の法に従って生き抜かれた方が、親鸞さまでありました。(文責 住職)